●糸谷哲郎（いとだに てつろう）
98年日本将棋連盟・新進棋士奨励会入り。2006年17歳でプロ棋士になる。森信雄門下。06年度新人王戦優勝、新人賞・連勝賞受賞。07年大阪大学文学部入学。11年より同文学研究科在籍。14年竜王戦挑戦権獲得と同時に七段に昇段。同年、竜王獲得により八段に昇段。

関西将棋会館で

◉将棋界のホープ

最高峰「竜王」奪取の快挙 将棋と哲学を究める阪大生

● 文学研究科文化形態論専攻 博士課程
将棋棋士・八段・竜王
糸谷哲郎── *Tetsuro Itodani*

日本将棋連盟関西本部所属のプロ棋士、糸谷哲郎さんは、大阪大学大学院文学研究科の現役学生。今秋、初のタイトル戦で、見事第27期竜王の座を勝ち取った。若手棋士仲間とともに「将棋界を盛り上げよう」と新しい形の将棋普及活動に取り組むなど、活躍ぶりが目覚ましい。

◀糸谷哲郎著
『現代将棋の思想
～一手損角換わり編～』
（マイナビ・2013）

今年9月、竜王戦挑戦者決定戦で羽生善治名人を破り、同時に七段へ昇段。タイトルを懸けた森内俊之竜王との七番勝負では、12月3日、4日の対局に勝利し、4勝1敗として竜王奪取の快挙を成し遂げた。

タイトル戦期間中、籍を置く大学院は一時休学。普段は原書の哲学書を読み込み「人間の背景」への考察を深める。「例えば、食事をする時にどこの店に行くかを決定する能力とは、果たして何に基づくのか、といったことを考えたりしています」

小学4年で新進棋士奨励会に入り、高校3年時にプロ棋士となる。大阪大学文学部へは現役合格。箕面市で一人暮らしをしながら「職場」である関西将棋会館（大阪市福島区）とキャンパスへ通う生活を続けている。

ここ数年、地方への出張が増え、ことに大学院進学後は仕事に費やす時間が増えた。対局以外にも、将棋の普及活動に積極的に携わりだしたことが大きい。プロ棋士とコンピュータが戦う電王戦や漫画などを通して、新しい層のファンが増加。その受け皿を作ろうと、2013年、豊島将之七段、西川和宏五段ら20代の棋士有志でプロジェクト「西遊棋」を発足させた。「将棋って面白そうだなと興味を持ってくださった方たちが、一歩先に進める入り口になれば」と、大盤解説をはじめ、リレー将棋、目隠し将棋、サイン会など、女流棋士も交え各地で多彩なイベントを展開する。ツイッターやフェイスブックでも活動の様子を発信、若手ならではの感覚と発想で、楽しく親しみやすい将棋のアピールに努める。

定跡にとらわれない自由な棋風にファンは多い。「非常にありがたいことです。私の将棋を面白いと思ってくださることが、価値につながる」「イベントなどで子どもさんたちにサインを求められるとうれしい」と笑顔を見せる。

将棋とともに幼少時から読書に親しむ。就学前に漢字が読めたそうで「ミヒャエル・エンデから入り、小学生の時には古本屋通い。星新一、小松左京、司馬遼太郎、高学年になると純文学に手を出して」という早熟ぶりだ。今も推理小説を多く読み、好きな作家は麻耶雄嵩。音楽はロックをよく聞き、ライブハウスにも足を運ぶ。

勝つことへのプレッシャーについては「その世界に身をしずめていると、まひしてくるというか、だんだん当たり前になってくる。大きい一番の時にその感覚が揺れ戻ってくることはあるのですが、流すすべも身に着けている。プレッシャーは盤上では出さない」ときっぱり。同じ広島県出身の升田幸三名人（1918～1991）の言葉「新手一生」、すなわち「一生涯新しい手を指し続ける」が目標。「自分じゃないと指せないような将棋を見ていただきたい」

▲ツイッターやフェイスブックで将棋の魅力を発信している

◉アメリカンフットボール部「TRIDENTS」・秋季リーグ戦で大活躍

チーム躍進のカギは結束力 目指すは1部昇格

大阪大学アメリカンフットボール部は、部員総勢80数名、体育会クラブの中でも1、2を争う大所帯だ。関西学生アメリカンフットボール連盟（1～3部53校）2部に所属し、2014年秋季リーグ戦では5戦3勝と大活躍。目指すは1部昇格。チームワークの良さが自慢の部員たちは闘志を胸に日々、ハードな練習を重ねている。

チーム名はTRIDENTS（トライデンツ）。ギリシャ神話に出てくる「三つの刃」を意味し、大阪大学と大阪外国語大学統合後の豊中、吹田、箕面の3キャンパスを表している。全体練習は土日を含め週5日、主に豊中キャンパスのグラウンドで行っている。「準備のスポーツ」と呼ばれるほど戦略が重要な競技だけに、練習後のミーティングでは、毎回、女子部員らが撮影した練習の映像をもとに動きを分析し作戦を練る。

主将・松本雄大さん

週3回の平日、グラウンド練習を終えた午後8時、豊中キャンパスの図書館下食堂はアメリカンフットボール部の貸し切りとなる。「健康と身体作りのためには練習も大切ですが、食事も大事。部の父母会の補助もあり、部員たちは1食あたり500円でバランスのとれたおかずと大盛りごはんの夕食をとることができる」と主将の松本雄大さん（理学部4年）はいう。「学部や学年は関係なくポジションごとに固まって食事をします。練習中にはできないような会話もはずみ、チームの親睦にも役立っています」とも。食後はさらに11時ごろまでミーティングタイムだ。

松本さんは「高校時代まで部活でサッカーをしていました。他の多くの部員と同様、アメリカンフットボールを始めたのは阪大に入ってからです」。入学当初は「サークルでフットサルなどを楽しみながらアルバイトもして…」という生活を思い描いていたという。「新入生歓迎の部活紹介イベントでアメフト部をのぞいたら、すごく明るい雰囲気で。先輩たちの情熱に惹かれて『何かに一生懸命取り組むのは学生時代しかない』と思い直して、入部しました」

ヘルメットにショルダーパッド姿の男たちが、楕円のボールを持って走る、投げる、タックルする。試合での姿や動きは華やかだが、その陰には一つの動きを何度も繰り返す単調な練習の積み重ねがある。「阪大生はやはり皆マジメ。地味な練習もまじめにコツコツやりきれるのが、僕たちのチームのいいところ。これは誇りです」と松本さん。そうした律義さを、部のOBでもある川崎彰監督は「すごいことはできなくても、やらなければならないことをやりきる。それがミスをしないことにもつながり、接戦になれば勝つ確率が高い」とみる。

「マネージャーではなくあえて『女子スタッフ』と呼ばれる女子部員の力も大きい。グラウンドでも、けがの具合の確認、毎日の練習の撮影と分析、ホームページの更新など多くの仕事を精力的にこなす頼もしい存在です」と話す。

部員たちは年数回、豊中市の小学校に出向いて「フラッグフットボール」を指導するなど、地域との交流にも取り組んでいる。

一試合で約30人が出場できるため、大所帯でも試合に出られる機会は多い。初心者でも努力を重ねれば、必ずチャンスはあるという。日々の練習や試合で、一人一人が「ワンプレイ」「この作戦」を思い描き、組織の中で自分はどう動くべきかを身につけ成長していく。

■アメリカンフットボール部「TRIDENTS（トライデンツ）」
1967年、大阪大アメリカンフットボール部「ハーキュリーズ」として創部。2008年、大阪外国語大「ギャンブラーズ」と統合し、現チーム名に。阪大と外大チームが見事に融合しチーム力を高め、和気あいあいとした雰囲気も特徴だ。理念は“意気地を持て”。関西学生アメリカンフットボール連盟2部に所属。